

(5) 注意する言葉遣いの事例

ビジネス社会では、間違った言葉遣いをして恥をかく場合が存外に多い。後で気がついて一人赤面すればよいが、気がつかないまましていると人間性を疑われるようにもなる。あるいは会社の品格や信用にも関わってしまう。ここでは、よくある間違いの事例を紹介していきたい。

<事例 1>他所の会社の人に、自分の上司のことを「〇〇部長」と肩書付で呼んだ

他所の会社の人に対して自分の上司を呼ぶ場合、「部長の〇〇」と言わなければならない。肩書（敬称）は自社内でのことである。それを外部の人との話のなかで持ち出すことは、ウチとソトの区別ができていないことを表明している。即ち、ケジメがないことを露呈しているのである。因みに、他人に自分の身内（父母や祖父母など）を「さん」「ちゃん」付けで呼ぶのは子供であって、大人の表現ではない。

<事例 2>帰宅する上司に「ご苦労様」と言った

「ご苦労様」は上司から部下にかける言葉であって、部下から上司へは「お疲れさま」と言わなければならない。上下関係は企業社会の秩序を形成している。上司は「お早う」、部下は「お早うございます」といったように、言葉遣いは正確にしよう。

<事例 3>「〇〇さんがお見えになりました」と案内した。

この場合は、「〇〇さんがお見えになりました」と案内することが正解。「お見え」と「なられ」の二重に敬語が用いられており、過度の敬語は耳障りとなってしまう。「お召し上がりになりましたか」も同様の事例であり、この場合は「召し上がりましたか」でよい。

<事例 4>「的を得る」と言ってしまった

「的を得る」という用語はない。「的を射る」と「当（とう）を得る」を混同した間違いである。聞きかじったままで言葉を確認せずに使用するとこのような間違いを犯してしまう。「やけどっくに火がついた」というのも同様で、「やけどっくい」（焼け棒杭）が正しい。また、「足元をすくわれる」のではなく、「足をすくわれる」である。

<事例 5>「全然大丈夫です」と言ってしまった

「全然」は否定を伴う語。したがって、「全然問題はありません」と言うことが正解である。このような言葉の乱れは、若者言葉から生じているようである。「〇〇のほうから説明します」や「お名刺のほうを頂戴できますか」などと、「ほう」という言葉を多用する若者が多い。正しくは「〇〇から説明します」「お名刺を頂戴できますか」であって、「ほう」は使わない。また、「〇〇でよかったのでしょうか」という言葉を耳にするが、「〇〇でよろしいのでしょうか」である。用法の間違いや流行の言い方は違和感をもたらし、また耳障りともなってしまうので覚えておいてほしい。

<事例 6>同僚の帰宅を告げる際、「〇〇は退社しました」と言った

「退社」という言葉には、仕事を終えて会社から退出する意味もあるが、会社を辞めることも意味する。「〇〇は失礼しました」あるいは「〇〇は帰宅しました」と答えることが

望ましい。

＜事例 7＞「御社」と言うべきところを「弊社」と言い間違えた

使いなれない言葉を使おうとする、あるいは付け焼刃で敬語を使用するとこのような間違いを犯すものである。敬語を上手に操るには、言葉と概念を一致させて自分の血肉としておかねばならない。

参考のために、応対用語の例を掲げておく。

＜応対用語の例＞

あたし・自分・僕⇄わたくし／うちの会社⇄わたくしども／さっき⇄さきほど／あとで⇄のちほど／済みませんが⇄失礼ですが、恐れ入りますが／誰ですか⇄失礼ですがどちら様でいらっしゃいますか／何の用ですか⇄失礼ですがどのようなご用件でしょうか／わかりました⇄承知しました／ちょっと待ってください⇄少々お待ち下さい／知りません⇄わかりかねますが／ありません⇄ございません／今来ます⇄唯今参ります／後で連絡します⇄後ほどご連絡いたします／もう一度言ってください⇄申し訳ございませんが、もう一度お願いします／会いたいのですが⇄お目にかかりたいのですが。お会いしたいのですが／(担当者)言うておきます⇄(担当者)伝えておきます。申しておきます／今席にいません⇄ただいま席を外しております